

### アルゼンチン韓国系移民文学作品選 短編小説「洗濯婦」

孟, 夏麟 / 川村, 湊[訳] / 金, 煥基[訳] / 守屋, 貴嗣[訳]

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

301

(終了ページ / End Page)

320

(発行年 / Year)

2012-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007851>

## 短編小説

メンハリシ  
孟夏麟:1977年アルゼンチンに移住。1996年「自由文学」に中編小説「双子兄弟の行進」で登壇。前《在亞文人協会》会長。

### 「洗濯婦」

茶色の糸巻きを連想させるコーティング・パーマのせいなのか、女の顔は異様に引き締まって見えた。その上、ガラスにひびが入るような金切り声で不平を言い続けている。

「カードをもう一度見て下さい。こう見えてもうちは十年、レンタルビデオ店を営業してるんですよ」

ウーラの前にカードを投げつけ、女は何度も指先で机を叩き続けている。女が叩く机の音が氷雨のように聞こえた。ウーラはやり切れない気分で、向かい側の机の上に置かれていたテレビモニターに視線を移した。主人公らしき男が、寂しげな顔を空に向けたまま、並木道を頼りなげに歩いている。BGMの〈Carmina Burana〉が映画のモップ・シーンのようにざわめいて流れ出す。そのシーンをそれとなく眺めているうちに、若干落ち着きを取り戻したものの、わだかまる気持ちをどうにもできず、ウーラは再び濁った目をした女に視線を戻そうと意識的に努力した。

話が大事なヤマ場にさしかかったと思ったのか、女はまるで韓国の伝統打楽器ケンガリ（鉦）をガンガン打つような口調で話を続ける。机の上に散乱して積み上げられているビデオテープを片付けていた男の店員が、動きを止めてちらっと横目で女を見た。`お客にそんな風に声を荒げてどうするんだよ、と言いたげな顔だ。ウーラと男の店員の二人の視線を同時に受け止め、女は一瞬身構えたが、攻撃の先手を

打つような顔をウーラに突きつけながら、絞り出すような声で言葉を続けた。

「お宅に、息子さんがいますね？」

突然この女は何を言い出すのだろうかとうーラは思ったが、この場で黙っていれば弱みを握られそうで、その質問に答えなければいけない状況になったような気がした。どれほど好感の持てる人であっても、ウーラは子どものことを聞かれなくなかった。かれこれ一年前に亡くなった息子ヒョンソクの姿が浮かんで来て、矢で胸の中心を射られたような衝撃が突き抜けるからだ。

中学五年生だったヒョンソクが卒業旅行から帰ってくる途中だった。夫のハンソクがヒョンソクを車に乗せていた。青信号と同時に発車したとき、横道から黄信号でも速度を落さずに走ってきたトラックと出会い頭に衝突した。ハンソクは無事だったが、助手席にいたヒョンソクは命を落した。あつというまの出来事だった。事故が起きてから一年間、ハンソクは追い詰められたように苦しんでいた。

「荷物が少し多くても、タクシーを使えと言うべきだった。僕のせいだ。あの日なぜ僕はあの子を後部座席に座らせなかったのか。いや、君が迎えに行くからと、僕は放っておくべきだった」

そう言うハンソクの、今となってはどうしようもないあらゆる後悔を少しでも和らげようと、ウーラは湧き出してくる自分の悲しみに対して毅然と対応した。ときどき、まるで荒涼とした冬の海の波のように激情が彼女の胸に波立ってくる度に、急いで錨を上げてもっと明るい場所へ向かって櫓を漕いで行こうと努力した。すでに失ったのはヒョンソクだったが、その上ハンソクまで失うことになるのではと、ウーラは重ねて気を引き締めなければならなかった。

現地人のある老人が、朝四時頃に車庫に入った息子を、泥棒と間違えて拳銃で射殺した事件があった。分家していたその息子は夜勤を終え、普段から持ち歩いていた鍵を使って親の家で少し休んだ後、妻の

元に戻るつもりだったらいい。ひと休みするつもりが永遠の休息となったのだ。その記事が載っていた新聞をクシャクシャになるまで握り締め、急いでゴミ箱に捨て、ハンソの目につかないようにした。

ウーラの過保護とも言える接し方によって、ハンソは徐々に部屋に引き籠もるようになった。ヒョンソクの事故以前のハンソは、とても活動的で進歩的な考えを持っている人だった。今のハンソは、見方によってはあらゆる世事から超越したように見えるかもしれないが、じっと眺めていれば、罪悪感の鱗を重ねて編み込んだ鎧を身に纏っていることに気付くのだった。

ウーラにとっては、自分より先にヒョンソクを看取ったことよりも重大で深刻なことは無かった。ウーラは自分が思っていることと現実との違いに狼狽えた。特に家の中を片付ける時にそうだった。重いと思って持ち上げた物が意外に軽くて、簡単に転んだりもした。どんな物も重く見え、どんな事柄も手が掛かると思われた。`事態を複雑にすることは簡単だが、事態を簡単にすることは複雑だ、という「マーフィーの法則」のように。

借りたことのないビデオテープを絶対に貸したと強硬に述べ続ける女のせいで、目の前に現れるヒョンソクの姿を押し退けなければならぬことがとても苦痛だった。いつも青いシャツに紺色のネクタイ、そして紺色の制服を着て現れるヒョンソク。ウーラが思い浮かべることが出来る、いつものヒョンソクの姿。ウーラは思い出したように、とぎれとぎれに言った。

「娘が、います」

やはりそうだ、という勝ち誇ったような顔をしながら、女は矢継ぎ早に続けた。

「息子は？ 息子さんはいませんか？」

ウーラは内心おののきながら、女が見ているはずの自分の顔に、少しも苦しみが表れていないことを願った。ウーラはわざと力を入れて

答えた。

「娘が、出来の良い娘がいます」

あまりに緊張したからか、背骨の辺りから何かガムカムカと込み上げてくる。

「なら娘さんが借りたに違いないです。ここを見なさい。三月十九日、外国映画三本、そして『薯童謠（ソドンヨ）』八編のうち四本」

やり込めてやったと晴れ晴れした声に関わらず青白い顔の女に較べ、ウーラの態度はやり込められたものとは正反対だった。女が出してきた必殺のはずの証拠は、逆にウーラに勝利を確信させた。女に対して申し訳なく思ったほどだ。無意識に背骨の辺りをギュッと押さえていた左手を、ウーラはそっと下ろす。いつの間にか胸のムカムカは治まっていた。ハンソが韓国に出発した日にちを話せば簡単なはずだ。

「夫は……」

少し唇を動かそうとしたが、とどめを刺そうとする女の勢いに、ウーラは口を閉じた。

「まだ何か言い訳をするつもり？」

横にいた男の店員は、まるで黒い煉瓦のように積み上げたビデオテープを、何台かのデッキに入れて巻き戻していたが、風を切るように肩を怒らせて外へ出ていく。

あれだけ何度も反復したにもかかわらず、自分の中の輪郭が曖昧になったような気がする。ウーラは混乱を起こさないように注意しながら、ハハッと笑った。

「こんなことまで言いたくはなかったけれど、夫は三月十五日に韓国へ発ちました。娘はコリアンタウンに出てくることは無いし」

やらなければいけない勉強が多くて、韓国ドラマに興味を持つような余裕なんか無いのだ、そんな言葉を続けてしまわないように我慢をする。ビデオを見ることには中毒性がある、と言い、ビデオの害を蕩々と語って娘がビデオを見ないのは、実はビデオ好きの父親がビデオを

見る邪魔をしないための娘なりの方便であり、そういう気遣いをする娘なのだ、ということまでここで明かす必要など無い。

「私の娘が借りるはずは無いし、夫も借りていないってことも断言できますよ」

ウーラは決然と言った。ビデオを借りるという些細な事柄にさえ自分はぐらつかないように注意しなければならない、今の自分はそういう局面に立っているのだ、と考えながら、ウーラは始めの頃とは打って変わって、女の発言に対する強い拒否感で、自分でも気が付く程に顔が引きつっていた。

「これ以上話をしても無駄です。この日付を記入した人と話させて下さい」

「何ですって！ これはうちの娘の字ですが、娘は今、学校へ行っていてここには居ません。確かなことはうちの娘はそんなミスを犯す子じゃないってことです」

長いまつげの下にあるウーラの大きな瞳が、冷静に、決断力を宿した鮮明な光を發し、長く続いた女との口論を取りまとめるように言った。

「あなたの娘がミスをしたかもしれないし、していないかもしれない。それは私にもわからない。でも娘さんが他の韓国人のお客さんと間違えた可能性はゼロではないでしょう。その点をよく調べてからもう一度お話したいんです。その後で連絡をして下さい」

首都プエノスアイレスで韓国雑貨店を経営している僑民は二軒しかないから、そんなに難しいことでもないはずだ。ウーラはハンドバッグを片付けてドアに向かった。

「ちょっと待ちなさい！ テープ代の弁償は……」

猛獣が戦うときのようなうなり声を出しながら、女がウーラを追いかけようとしたとき、ちょうど男の店員が入ってきて、ウーラに頭を下げながら挨拶をする。そして女に向かって目を細め、止めろと言わ

んばかりに二、三度手を振った。

街には霧のように小さい粒子の雨が降っていた。ジョビスナ (Ilovizna)。現地人たちが霧雨を称する言葉だ。頭を下げたまま歩いているウーラの腕を誰かが軽く掴んだ。韓国人聖堂のキム・マリアンズシスターだ。

「何についてそんなに深く考えていらっしゃるんですか？ 何度もお名前を呼んだのですが、気付かないなんて……」

「こんにちは、シスター」

雑然とした状態の心を、急に親密さで満たさなければならなくなるとき、どうしても少し困惑してしまう。

「復活祭が過ぎたら一度そちらにお訪ね致します。最近は病人の訪問をしているので、時間が取れないのです」

「そうなのですか」

急ぎ足で歩き出したキム・マリアンズシスターにウーラは手を伸ばしたが、すぐにその手を止めてしまった。

昨年の復活祭の時、キム・マリアンズシスターは、それほど大きくはない籠に、色とりどりの卵を幾つも入れ、籠の回りには緑豆のサイズの小さくて可愛らしいドライフラワーを飾ってウーラにプレゼントしてくれた。

ウーラはドライフラワーがあまり好きではない。しかし、いつも厳粛な表情をしているキム・マリアンズシスターが、厳粛な表情のままウーラを慰めようと骨を折ってるのが感じられた。そして、泣きたければおもいきり泣き尽くせばいいと、ウーラに言ってくれた唯一の人だった。ウーラはとても感謝しているし、特別の存在だと思っている。だからキム・マリアンズシスターからもらったドライフラワーは、裏庭のツルマンネングサが密集し、小さな丘のように盛り上がった場所に刺しておいた。

自然とは何と偉大なのだろうか。雨の日は勿論、曇った日や夕方になると、ドライフラワーは咲いたまま干されたことを忘れ、また死すら忘れたように恥じらいながら花びらを萎ませ、昔の蕾の姿に戻るのだった。日の強い日と晴れた天気の日朝になると、再び生命が宿っていると思わせるほど本来の姿で大きく咲き誇り、いつ蕾だったのかと言わんばかりの、何食わぬ姿で満開に花びらを開く。根さえ失い、すでに腰が折られた針のような身体であるはずなのに。

ホームシックがぶり返す度にいろいろな草花を育てながら、自然の中には自分を奮起させるものが無数に存在し、咲き誇っていて、それは無償の宝物なのだという事実にも心救われるのだったが、天気が悪い日や夜のドライフラワーの前では、ウーラは息苦しさを感ずるのだった。

キム・マリアンズシスターに会うとすぐに、そういったドライフラワーにまつわる事柄が思い浮かんだが、ウーラはシスターを呼ぼうとした手をそのまま下ろしてしまった。私の中の何かが欠落しているからドライフラワーを神秘的に感じるのだろう、という気持ちがフッと浮かんできた。

手洗い場に近づいて水道の蛇口を捻る。螺旋状に渦巻いている水が流れるのを見つめていると、やっとするべきことを見つけ出したかのようにウーラは水道の蛇口を閉めた。

八十六歳の母親に会いにハンソは韓国に発った。ウーラも娘のソヒョンもビデオ鑑賞をそれ程楽しむ方ではないのに較べ、ハンソは趣味のように「神秘の国シリーズ」のような作品を見ながら、ちょっとしたことで泣いていた。

ふとビデオデッキのある部屋に何かを取りに入ったとき、ソファの上で胎児のように丸まって、笑ったのか泣いたのか、目が赤くなっているハンソを発見すると、ウーラはソヒョンを呼んで、目を潤ませ

たハンソを見ながら、二人で一緒に笑ったものだった。

そんなことがありながらも、ウーラとハンソの生活はいつも同じ場所で営まれていた。

三月十五日、韓国に行くためにエソイサ空港に向かいながら、ハンソはウーラに頼むことを忘れなかった。

「<テピョンセウォル（太平歳月）>にビデオテープを返すのを忘れないでくれよ。帰ってきたら続けて見るつもりだからカードはそのままで、と言っておいてくれ」

ハンソが散らかしたまま出ていった家の中をあらかた片付け、彼がいない静寂をゆったりと過ごしてから、ウーラはシエスタ (siesta) 時間を選んで<テピョンセウォル>に行った。持っていった四本のビデオテープの他に、全く知らないビデオテープの名が幾つか書かれていた。

ハンソが韓国に発つ日、ウーラが店を空けることが出来ないということをよくわかっていたハンソは、友人のジェブが運転する車を出て、振り向いて二、三度手を振った。しかしウーラは手を振り返さなかった。そうすれば彼にもう二度と会えないかもしれないという恐怖に包まれていたからだ。ヒョンソクがそうだった。旅行に行くとき、嬉しそうに手を振って出ていったヒョンソクは、行ったきり二度と帰ってこなかったではないか。

ウーラは急いで店のドアを押し開けて外に出た。そんな風に見送ってはいけないという心の声が聞こえ、ハンソが手を振ったのは必ず帰ってくるという彼の誓いとして受け止めるべきだ、と思い直した。ウーラは慌てて道路に飛び出したが、ハンソが乗った車はおもちゃのように小さくなり、カーブを曲がると視界から消えてしまった。思わずウーラは泣いてしまった。涙を乾かそうと空を見上げ、思い浮かんで来たハンソの泣き顔を必死で消そうとした。何か鬱屈した感じが、ウーラの胸の中に霜のように降りた。

ハンソと二人きりになったばかりの頃、ウーラは何かというと泣きそうになった。何故ハンソと二人でいると、急いでいるような切なさ、まるで子どもの頃感じた、村はずれに駆けて行ったときのような不安な感じが甦るのだろうか。以前は感じなかった、心の奥に潜む荒々しさまでも一緒に……。

ハンソにはわからないだろう。悲しみを共有すること、あるいは自分の方が相手よりももっと悲しんでいると感じることの方が楽なのだ。一人になったとき悲しまないようにすることがどれほど苦しいことか。

ハンソが悲しさに涙にくれる度に、ウーラはいつも涙腺を乾かすのに必死だった。彼の涙がウーラの胸を少しでも濡らすことがないように。

ウーラは、悲しみに耐えるためには、確固たる何かを探さなければならないと思った。そのために努力に努力を重ねた。しかしその思いは心の奥底に、日々の静寂と生来の我慢強さによって沈み込んでいった。ハンソは日が過ぎれば過ぎるほど濡れた目をし、ウーラはその涙で洗い出したばかりのハンソの眼差しに慣れていった。

ウーラより後から引っ越して来て、ブエノスアイレス近郊に住んでいる妹のソクラは、日曜日にはコリアンタウンにある韓国聖堂からの帰りに必ずウーラを訪ねて来た。ウーラの苦しみを誰より知っているソクラは、訪ねて来る度にウーラを慰めた。

「お姉ちゃん、自然を誰よりも愛して植物の一種じゃないかと思うほどのお姉ちゃんが、生物である人間の死を受け入れないってことは理屈に合わないでしょう。お願い、お姉ちゃん、もうお義兄さんを許してあげて」

「許す？ そんなことじゃないわ。あの人何か悪いことをした訳でもないのに。私はもう今までとは違うように生きていただけよ。楽に生きていただけ」

「でも、それは結局楽に生きていないことにもなるのよ」

「私はただ何かを奪われたとは思いたくはない。ヒョンソクに対する私の結論はそういうこと。私はあの子を失ったんじゃないよ。先に送ったのよ。確かなのは、私はハンソみたいに胸が潰れたまま生きてくはない。私は私を鍛えたの。こうなるまでにはヒョンソクの死が大きな役目を果たしたんだらうね。もしかすると私は人からは憎たらしく見えるかも知れない。あまりに何気なくて、あまりに悲しく見えなさ過ぎて……」

ウーラは唇を噛みながらある日のことを思い出した。聖堂でたまに会う友だちとくアルト パレルモというショッピングセンターに行ったときのことだ。昔は何もかもが綺麗に映って見えた目が、何も綺麗ではなく、何も感動しないものになっていることに気付いたのだ。「お姉ちゃん、ゴルフでもまた始めればどう？私、気になるの。なぜある日突然やめる気になったのか」

「ある日突然ではないってことは、あなたが一番知っているはずじゃないの。あの子が去った後、枯れ果てたすべての物の中で、私のゴルフクラブが真っ先に倒れたんだと思えばいいわ」

「でももったいない。今となっては僑民の女性ゴルファーは百人を上回るけど、お姉ちゃんがゴルフを始めた頃は、十人もいなかったじゃない」

「そんなことの何がそんなに重要なの。今考えてみれば私はゴルファーに向いていなかった気がする。大きな時間の浪費だと思ったことも一度や二度じゃなかったし。結局は蟻の堂々巡りみたいだという思いは振り払えなかったんだから」

「お姉ちゃんにそういう面がない訳ではないけどね。まあ、一言でいうと変わり者だよ」

ウーラはその言葉に、はじけるように笑いだした。ソクラは変わり者と言う表現が面白くてウーラがこれほどまで笑っていると思ったは

ずだ。

赤ん坊は生まれて八ヶ月までは表情の管理が出来ないらしい。赤ん坊が誰にでもニコニコ笑うのは、見慣れていなくても人が好きだからとか、気持ちが良いくて笑うのではなく、あまりにも見慣れなくて気持ちが悪いの、いざとなればどんな表情をすればいいかわからないからそうやって笑うのだと。

ウーラは、この世に生まれてまだ八ヶ月経過していない赤ん坊のように、泣くべきか笑うべきかすら判断が出来ないのだ。

客が来たことがわかるように、店のドアに付けておいた鈴を鳴らしながら、娘のソヒョンが入って来た。店の裏側に住居があり、大学から帰ってくるとソヒョンはウーラに挨拶してから母屋に行く。今まで忘れていた、昼のレンタルビデオ店での出来事を、報告するようにソヒョンに説明する。

「ママ、私が何度も言ったじゃない。誰かから喧嘩を売られたら我慢せず戦うべきだって」

「あなたはもう私の友だちじゃなくて母親になるつもりなの？ それは私の役割じゃないかしら」

ヒョンソクがああなってから、ソヒョンはウーラに対して敬語を使わなくなった。

「駄目よ、ママ。私はもうママの娘ではなく、友だちになった方がいいと思う」

三歳から教え始めた敬語だった。それまで重要だったすべてのことがつまらなくなり、大した問題ではないと思ったので、ウーラは容易に受け入れてしまった。

「それとママ、パパは『薯童謠』というドラマを一度も見ただけなのに、八番から書いてあったんでしょう。答はすぐ出るんじゃないの？ もうママってば。でもあのビデオ屋のおばさんよりは一枚上手だと裏で笑ったんでしょう。いや、表でも少しは笑ったかもね」

ソヒョンはいつもこのような調子でものを言う。あらかじめ用意していたかのような答えを適切にくり出すのだ。

ヤンジが入ってくる。ヤンジはウーラの家と二ブロック離れたところに住んでいる友だちだ。ヤンジは毎度こうして気軽に訪ねてきて、どうでもいいような世間話を延々と繰り返す。移民生活については疲れを忘れて文句ばかり言うけれど。

「必ずこんな風に過ごさないといけないのかしら？　こんなにどうすることもできないぐらい忙しく過ごすために移民して来た訳？　こんな覚悟で韓国で頑張っていたら私たち、今頃財閥になってるわよ」

「どうしようもないでしょう。私たちは財閥になろうとして移民して来た訳じゃないでしょ？　私たちはもう生きるだけ生きたし、仕事が好きで働くんだし、それでいいじゃない？」

「そうね、そんなことまで言うようになったのね。あなたは競争のほとんど無い独占状態の店で、暇なときは本を読んで、音楽を聞いて…。私、今まで言わなかったけど、あなたが羨ましくて仕方無いんだもの」

「変なことが羨ましいのね。私が見た限り、私たち移民は三つのタイプがあると思うの。韓国に行けばアルゼンチンが恋しく、アルゼンチンに居れば韓国が恋しくなる人がいて、アルゼンチンに居ればアルゼンチンが嫌になって、韓国に居れば韓国が嫌だと思える人もいて、そしてアルゼンチンも好きで、韓国も好きだという人もいる」

「はいはい、あなたのように韓国は母国だから好きで、この国は第二の故郷だから好きだという人もいるはずだし。夏は暑いから好きで、冬は寒いから好きだと言ってるあなたと私が何の話をしたのか理解出来なくなったわ」

「すねたの？」

「いや、そうなんだって思って。何で？」

「そうなんだって、何が？」

「そう、そうなんだ、のそうよ」

ウーラは小首を傾けた。嫌味を言ってるのだろうか。そう感じるほど、今まで二人は一度も嫌味を言って争ったこともない。何かヤンジの目の中で動いた。それは嘆きの煙みたいなものだったのかもしれない。そうして休んでいたヤンジは、小走りで帰っていく。彼女がいなくなった道を眺める。樗と柳の落ち葉が歩道をすべて埋め尽くしていた。

オーディオをつける。ショパンだ。軽やかでさわやかなメロディーは刻み足で歩く鳥たちになり、タラララッと音がこぼれ出す。ウーラは壁にもたれかかり向かい側の壁にかかっている「洗濯婦」を見上げてみる。

いつだったか妹のソクラとフランス文化院で開かれたフランス大家美術展に行ったとき、「洗濯婦」という題名の複製画を一点買った。「洗濯婦」は、洗濯を終えて窓の外を眺める女の不格好な手と白い顔の、そして黒い広がったスカートの平凡な裾から、生に対する困窮とメランコリーが濃く染み付いている、トゥールーズ・ロートレックの絵だ。

普段の生活で少し疲れたと思うとき、特に自分の心が荒れ果てた畑のようにカサカサして沈んだ気持ちになるとき、ウーラは女の剛直そうに見える腕と曲がった背中の屈折を何てひどいポーズなんだろうと思ひ、そこから苦しい生活の断面を感知していた。

まばらな茶色の髪の毛を後ろで結んだ「洗濯婦」を見つめていると、ウーラの手は自然に自分の頭に向かい、横髪をきちっと後ろに撫でつけて整えた。女は木製のテーブルの上に節の太い大きな手を乗せて窓の外を眺めているが、ウーラはほんやりと壁にもたれて、絵の中の窓の外を眺めるのだった。「洗濯婦」の窓を通して、数多くの過ぎ去った日々を眺めていると言えるかもしれない。

霧雨はいつの間にか止んで、空の片隅には上弦の月が出ていた。弦

の丸い部分が韓国とは反対に出ている月だ。地球の反対側に位置しているからか、アルゼンチンには韓国と反対の現状が沢山ある。季節も反対、夜と昼も反対。韓国人はコップや皿が割れれば運が悪いというが、アルゼンチンの人たちは災いが打ち砕かれて運がいいという。ウーラはその度にエスキモーの人たちを思い出す。エスキモーの人たちが冷蔵庫を使う理由は、食べ物を「冷やす、のではなく、食べ物を「凍らせない、ためだという。

押さえつけていた悲しみの氷柱がだんだんと大きくなって、胸のあたりに冷たい苦痛を感じたとき、ウーラは表側に「三歳と六歳」と書いてある録音テープを聞く。ヒョンソクとソヒョンが小さいとき、プラスチックのブロックと宇宙人のおもちゃを持って遊んでいた際、絶えずひそひそと話し合っているのを子どもたちに気付かれないように録音しておいたテープだ。

ブロック遊びが楽しかったのか、お互いにじゃれ合って、カチャカチャと乾いた音に混じって、子どもたちの笑い声と、聞くほどに懐古と惜別を感じるヒョンソクの声聞くことで、胸にぶら下がっていた氷柱が溶けていき、胸の奥にあった慟哭も無くなっていった。それほど大事にしてきた自分の子どもが、今ではウーラの心の奥に度々氷柱を凍らせる原因になった。

店と母屋の間にあるドアを開けて、ソヒョンが現れた。手には蚊取り線香を持っていた。

「ラジオで言ってたんだけどママ、ウルグアイで蚊の大群が現れたって」

「アルゼンチンに到達するのかな、まだわからないんじゃない？」

「カピタル(首都)は、たぶん明日ぐらいから奴らの大暴れが始まるでしょうね。だけどママ、ギジェルモが何て言ったか知ってる？」

「ギジェルモ？ ああ、コメディアンみたいなウィットのあるユダヤ人？」

「ギジェルモが、あのね、蚊はデアットゥロを怖がるから、演劇鑑賞を沢山するしかないって」

「どうして？」

「デアットゥロは手を沢山叩くところでしょ」

ウーラは、ハハッと笑う。ウーラの笑う姿を見ると安心したように、ソヒョンは蚊取り線香を引き出しに入れて再び母屋に戻って行った。秋であればウルグアイの蚊の大群は、どっと押し寄せて来て群れになって人間を刺す。近々秋が迫り来ることを知らせる伝令部隊のようにとても堂々としていて、猪突猛進という言葉が当てはまる。

近郊で農場を経営しているソクラの家で見たパラグアイの蚊は本当にすごかった。大きなハエくらいの大きさで、一度刺されると蜂に刺されたくらいヒリヒリするし、その上、何日か過ぎると刺された部分から幼虫が這い出てくる。

ドアの鈴が鳴った。ヤンジが入ってきた。

「いらっしゃい」

一日に一回や二回、ときには三回現れても、ウーラはそうやって彼女を温かく迎えた。ヤンジの手には三つか四つ餅の箱があった。

「何だか今日は韓国のことが頭に浮かんで。働いてる子がごはんを用意するのを見て、何だか憂鬱になってしまっ」

「そんなの初めて見るものでもないじゃない。一日に必ず一回は見てきたことじゃないの？」

「それはそうなんだけど。私が悪いの。気分によって左右されるんだから、私」

現地人たちは、韓国人が好んで食べる餅を全く好まない。一度は挨拶程度に食べてはくれるが、二度は食べない。ガムみたいにくちゃくちゃしているからだろう。実際にアルゼンチンのガムはゴムが沢山混じっているかと思うほど、度を越えた歯応えがある。

彼らは米でごはんを炊くときも、瑞々しくてもっちりしたごはんよ

りは米の粒が互いにくっかず、一つ一つが独立している米粒を好む。だから高級な米の表紙には「全くくっつかない米」という広告文が、堂々と偉そうに重々しく添付されているのだ。

だからこそヤンジの家の現地人の家政婦は、セーター工場の技術者たちにご飯をつくる際、炊きあがったご飯の粒をざるに入れて一度水で洗う。そしてわざと独立した飯粒をつくる。そうでない場合は、生米を油で炒めてからご飯を炊いて、塩をかけて終わりのときもある。徹底した個人主義の標本であるアルゼンチン人同士の人間関係を、これ以上無いほどよく表している。

「そもそも、この国は乞食も掃除婦もエチケットを守るんだもの！」

「変わってるわね。私はそれがいいと思っているけれど？」

「私は違う。大体エチケットって何？ 実はそれは疲れるものなのよ。情も湧かないし」

「どうしたのかしら。まるで純韓国的なものばかりを好もうと決めたみたいに」

ヤンジは「洗濯婦」を穴があくほど見つめていたかと思うと、いきなり話した。

「ああ、身の程も知らないまま私は何で移民してきたのかな？ 生きるという事がこんなに乱闘劇みたいだなんて。一体私に静けさって存在したことあったっけ？ 自分でもみっともないわ」

ウーラはヤンジが愚痴を言う間は放っておく。いつだったかヤンジがそうしているときに途中で帰ってしまったら、その後ソヒョンに叱られたからだ。

「ママ、おばさんは頼れる人がママしかいないから愚痴を言っているのに、何でいちいち直してあげようと思って聞くの？」

「じゃあ、間違ったことを言ってるときもそのまま聞いてあげるの？」

「そうよ。おばさんはただ寂しくてそうしているんだから。ママ、おばさんが愚痴を言っているとき、ちゃんと見たことがある？ 決まっ

てあの『洗濯婦』みたいなもの。不意に背中も曲がって見えて」

「そう？私にはわからないわ」

「そういうとき、ママは『洗濯婦』を見つめる人みたい」

ウーラはヤンジと「洗濯婦」を順番に見つめた。

「あらあら。子供たちが帰ってくる時間だわ。行かなくっちゃ」

ヤンジはいつものようにせかせかと歩いて帰っていく。彼女はいつもゆっくり入ってきて走るように帰っていくのだ。

ウーラは外を振り返ってみる。いつの間にか暗くなっていた。周囲に薄暗さが徐々に滲んでいく。陳列棚を装飾している電灯を一つずつ付ける。店の灯が漏れ出て、薄暗かった庭は少し揺らめきながらより濃い光を放ち、部分的に明るくなっていた。

再び「洗濯婦」の窓の外を見つめていると、女が入ってきた。〈テピオンセウォル〉の……。先刻とは変わって、意外にも複雑な表情で、うなだれている態度なのでウーラは多少気がかりだったが、客として迎え入れた。

「いらっしゃい」

外の冷たい風が彼女を包み込んでいたからか、ブルッと身震いするほどの冷気が感じられた。ウーラは女に対する気遣いで、店内のシャンデリアも付けた。女はいつの間にか壁の中心部に掛けられている十字架像に向けて、慎ましく頭を下げている。まるでミレーの「晩鐘」に出てくる女のように、真面目で厳粛に見えた。

しばらくの間そうしていた女の顔は、明るく晴れやかで穏やかと言うには弱々しく、和やかと言うべきだろうか。先刻の女とはすっかり変わった姿をどうやって受け入れればいいのか、ウーラはばちばちと何度も瞬きをした。女は大げさにフラフラしながら、店内をぶらついた。ぎこちなさという感情が物質化して、全く手に負えないほど重く感じられた。

「どうぞ座ってください」

「あの、すみません。娘が学校から帰ってきて、夫も交えて他のカードを較べて、調べてみたんですが、娘がうっかり他の韓国雑貨店に貸した物を……」

あえて返事はいらな**い**と思**い**、ウーラはと**と**も慎重に笑**い**返した。インターフォンを押してソヒョンに緑茶を持**っ**てくるように頼んだ。ソヒョンが持**っ**てきた緑茶を女はゆ**っ**くり吟味するよ**う**に飲**ん**でいる。

電話のベルが鳴**っ**ている。母屋に行く途中だ**っ**たソヒョンが取る前**に**、ウーラが受話器を取**っ**た。ハンソだ。彼は日常的な質**問**をしてから、いきなりアルゼンチンに梅桃ゆすらうめの木があるかと尋ねた。

「無**い**です。でも何で梅桃？」

「苗木を一株持**っ**て帰ろうかと思**っ**て。いいだろ**う**？」

「止して下**さ**い。あなたはムン・イクジョム(朝鮮時代に綿を朝鮮半島に持ち込んだ人)の子孫でもあるまいし」

そうして持**っ**て帰**っ**てきた幾つもの木が、垣根の周りを囲**ん**であちこち高くそびえ立**っ**ていた。まるで故国という垣根を張り巡らせるかのように。特に棗の木は見る度に感心するほどどしりと根を張**っ**ている。何人かの同胞を除いては所持している人がいない木だ**っ**た。梅桃、以前ならば素直に「そうして」と言**っ**ただら**う**。

何事なのか、怪訝に思**い**ながら彼は電話の向**こ**うで少し深刻な気配にな**っ**た。

ウーラにはヤンジの姿が思**い**浮かんでいた。だんだんと沈んでいく陽を見る度に幼い頃住んでいた故郷の家に対しての郷愁を感じ、自分の国に戻りたいと思**い**ながら生きることに慣れることが出来ず、気が変になりそう**で**、もう急いで永久帰国したいと一昨日ヤンジはいきなり泣き付いて来たのだ**っ**た。

「子どもたちはどうするの？ 落ちこぼれた勉強と環境への適応、そういう問題が限り無く出てくるはずよ」

「置いていく」

「何ですって？ スンピヨはまだ大学にも入る前なのに」

「もう親の懐から離れる年齢になったんだから」

「あまりにも早まった決断のように思えるのだけれど」

「いいえ、決してそうじゃないわ。私たちはもうずっと前から遺言状まで作成しておいたんだから」

「どんな内容なのか見なくてもわかるわ。店とつながった二つの家はスンへとスンピヨに一つずつ残す。私たちが死ねば臓器は寄贈して、火葬して痕跡を残すな」

「あら、よくわかったわね。本当にそうしたの。そうしたらスンピヨが何て言ったか知ってる？ 歩く病原体みたいにいつも何処かの調子が悪いのに、あれこれあげようなんて考えが何処から出てきたんですか？ いつも空腹さえ我慢出来ずに、家族たちより先に何口か食べてやっと元気になってたじゃないですか？ それなのに何で今回はそんなに強く決心したんですか？ 何かあったんですか？ そうやって追求するじゃないの」

「本当に何かあったんじゃないわよね？」

「何かって何？ スンピヨは赤ん坊みたいに、今までは構って欲しいものだから、何でも大げさに言ったりして。もう大きくなったのだから今からでもしっかりして欲しくて。本当にもう帰るわ。年を取ってしんどいからか、決心がとても心に染み込んで来るのよ。本当は子どもたちも連れて行く計画だったの。でも子どもたちが必死で反対するのよ。二度と新しい環境に自分たちを追い込まないで欲しいって。本当に改まった顔でね。新しい土地に移って、ひどい疲労で病気にかかったまま何十年も過ごしたような、そんな経験をしたことのある当事者の私が、あの子たちの苦痛を知らないふりをしてしまうと、私は本当に悪い母親になってしまうと思って」

そう言ったヤンジは、自分でも驚いたようにあわてふためいて、素

早く袖をつかんで泣いた。泣いて笑って、そうしながら何度も涙を拭いた。ウーラはヤンジのそんな決心が一日二日でついたのではないことをよく知っていた。

ある人は死ぬ準備だけでは足りなくて、自分の臓器まで寄贈するって言うてるのに、人の国にまで来て、植物に未練がましくする必要があるのだろうか。お客さんと話の途中だと言ってハンソとの電話を切ると、女は今だと思ったのか席を立った。女の服の裾がパタパタと風になびいていた。女は何度も謝罪と御礼を繰り返し、卓上に甘柿などがギッシリ入った箱を置いて出て行った。

粘りつくように追い掛けてきた暗闇に場を譲ろうと、日の暮れた夕方の冷気は薄い灰色に染まって行った。ウーラは再び「洗濯婦」を眺めた。他人が見たら驚くくらいしょぼりした態度で。

いつも働いているときは、窓の外を眺めている姿勢だと思っていた「洗濯婦」だったが、今のウーラには一日をようやく終え、やり切った気持ちと休息の喜びを期待しているように見え始め、肩が軽くなった気がした。

休息を考えるとあくびが出た。別に仕事らしい仕事をしたのでもないのに、どこからか疲れてだるい気持ちが出てきて、あくびの先に結ばれていた。屈曲した背中、大きな手、憂いに満ちた表情ではなくとも、「洗濯婦」とともに窓の外を眺めながら、一日一日、注意深く見つめて行くことになるのだろう。近づいてくる日々を迎えるとともに、過ぎた日々へのお別れまでも。

.....

川村湊（かわむら・みなと）：法政大学国際文化学部教授

金煥基（きむ・ふあんぎ）：韓国東國大学日語日文学科副教授

守屋貴嗣（もりや・たかし）：法政大学大学院国際文化研究科兼任講師